3 未来につなげる伝統芸能の創造 ——浄るりシアターの試みと「アジア芸能の未来」を通して

1 2020年度プロジェクト「“未来のアジア芸能”をつくる ～ステージの表現～」立案の背景

2020 年度，受講生のみなさんと一緒に「未来のアジア芸能」をつくりだすプロジェクト――個々の伝統芸能を，ステージという限られた空間の中で観客にいかに魅せるのか，未来につながる表現の可能性を探りながら，アジアの伝統芸能・日本の伝統芸能を組み合わせたプログラムを企画するプロジェクトが始動しました。

例えば日本の伝統芸能の場合，歌舞伎や能，人形浄瑠璃は専用の舞台で演じられます。また広くアジアの芸能や音楽，日本の民俗芸能や音楽の場合には，生活空間や屋外などで演じられるものも少なくありません。一方で公立の文化施設がこうした「専用の舞台」を有しているケースは稀であり，多くが様々な用途に使える舞台機構となっています。したがって，目の前にある「ステージ」の特性を理解し，それを最大限に生かしながらどのような表現の可能性があるのかを探ることが，施設の担当者，あるいはそのような文化施設を利用して公演活動を行う実演家の立場からも重要になってきます。

このプロジェクトでは，公立の文化施設の立場から大阪府豊能郡能勢町にある「浄るりシアター」館長の松田正弘氏と，実演家の立場からジャワガムラン演奏家の木村佳代氏・樋口なみ氏を講師に招き，さらに公演を作る段階では舞台の専門家に加わっていただき進めました。本稿ではじめに「浄るりシアター」の取り組みについて見ていきます（ジャワガムランの創造的な取り組みについては，本ハンドブックの第 2 部「ジャワガムラン――創作公演の基本知識と事例紹介」をご参照ください）。

2 「浄るりシアター」の挑戦

(1) 概要

大阪府豊能郡能勢町には，約 200 年前から素浄瑠璃《能勢の浄瑠璃》が伝わっています。

1998 年，素浄瑠璃に新たに人形・囃子を加えた人形浄瑠璃がデビューしました。子どもから大人まで幅広い年齢層の地域住民が参加するこの活動を，継続性のある確かなものにするために，2006 年に「能勢人形浄瑠璃鹿角座」（以下「鹿角座」）を旗揚げしました。1993 年に開館した町立の公共文化施設「浄るりシアター」を拠点とした能勢人形浄瑠璃の活動を通して，現代演劇の要素を取り入れたオリジナル演目の創作にも取り組んでいます。今日 9,600 人の能勢の人口の中に語り手が 200 人以上いることを活かし，鹿角座の太夫は《能勢の浄瑠璃》の継承団体である「能勢町郷土芸能保存会」会員が務めます。人形浄瑠璃文楽座の技芸員等の指導の下で技術向上を図りながら，後継者の少ない三味線の担い手を育成するなど，新たな分野との融合への挑戦を常に続けています。まさに伝統の保存・継承を重視し，「地域の伝統とともに歩む」体制をとりながらも，地域独自の新たな文化的土壌を醸成しつつあります。

(2) お浄とるりりんの誕生

次に，いくつか具体的な“仕掛け”をご紹介します。伝統芸能全般に「若年層が弱い」ということが言えますが，《能勢の浄瑠璃》も例外ではなく，小学生や中学生に「あなたの地域の伝統芸能はすばらしいですよ」と言っても義太夫節を子供が理解することは難しく通用しません。そこで，若い人たちを取り込む一つの仕掛けとして，素浄瑠璃に人形を加えて“擬人化”した人形浄瑠璃を，さらに“擬人化”してキャラクターにしました。全国から集まった 68 点の応募の中から人形

浄瑠璃文楽座の桐竹勘十郎氏，鶴澤清介氏らも選考に加わって3点に絞りこみ，等身大のパネルを作ってステッカーを貼ってもらうAKB48を真似た“総選挙方式”で街中で投票してもらい，能勢の人形浄瑠璃を擬人化した女の子，「西能浄（お浄）」と「木勢るり（るりりん）」が誕生しました。

1年目は舞台上に映し出してボーカロイドで舞台の解説に出演させ，2年目は人間の太夫と三味線とともに廻り舞台に出演させました。3年目はついにお浄とるりりんの三人遣いの浄瑠璃人形をつくり舞台に出演させました。人形浄瑠璃を“擬人化”したキャラクターを，さらに浄瑠璃人形にしたのは，日本初，いや世界初のことです。

そして現在は，観光協会でファンブックが作成されるなど，町の観光大使としても位置付けられています。これにより，これまで人形浄瑠璃を見たことがないお浄とるりりんのファンがこれをきっかけに町に足を運び，淨るりシアターで人形浄瑠璃を見るようになり町内を観光するようになりました。さらには，ファン自らグッズを作って淨るりシアターに持ってきたりと，町外から盛り上げ応援する姿は，鹿角座の励みとなり，他の住民にとっても，自分の町の伝統文化を再認識するきっかけとなっています。

(3) 伝統と現代

鹿角座では，毎年6月に本公演を行うほか，外部からの依頼公演を年間約20件行っています。新作も多く手掛けており，浄瑠璃人形の衣装は洋服生地を使ったり，チラシは流行った映画や時事ネタを盛り込んだりと多くの目を惹く仕掛けがなされています。

鹿角座公演チラシ

指導には文楽の技芸員が入っていますが，通常は太夫，三味線，人形で三業なのに対して，御簾の中で表に出ない囃子を表に出した四業で構成しています。また「鹿角座は文楽座のそのままをやるのではなく，あくまでも“能勢の人形浄瑠璃”を作っていきたい」ということを，指導の文楽座の技芸員らにご理解いただき，古典以外にも創作を手掛けています。古典芸能の世界では，一般に「昔のそのままを忠実に師匠から弟子に受け継ぐ“伝承”」であるため，演出家や照明，音響などのプランナー（創造者）が存在しません。しかし，そもそも鹿角座は新たな芝居を創造することを目指し立ち上げられ，当初から演出家や各プランナー，衣装デザイナーも入れて創造活動を行ってきました。

3 未来のアジア芸能 ～“進化×深化”を目指して～

さて，「未来のアジア芸能」をつくりだすプロジェクトの背景と意図は冒頭で示しましたが，これに講師の松田氏が重ねたのが「アジア芸能の進化×深化」というテーマです。ここに至った背景には，淨るりシアターで新しいことをやろうとする松田氏に対し，今は亡き竹本住太夫師匠がかけた言葉があります。

「松田はん，『曽根崎心中』というのがあるやろう，近松はんが書いた。あれっていうのは，今ではみんな，当たり前に聞いているやろう。昔，あんなんじゃなかったんやで。そのときの太夫が，その時代時代に作りこんでいって今の洗練された『曽根崎心中』になってるんやで。せやさかい，あんた，頑張りな。きっとうまいこといくで。」

これの意味を考えていくことも，このプロジェクトの重要な課題の一つとなりました。

あわせて，松田氏から提示されたのが「プロデューサーの5か条」です。

①こだわり（ポリシー）を持つこと
②作品に対して知識を持つこと
③予算を把握すること
④人脈を豊かにすること
⑤常に企画を考えること

③の予算の把握については文化庁の補助金を受けて実施するプロジェクトという性格上，コー

ディネーターが管理することになりますが，それ以外を達成すべくプロジェクトが進行しました。

4 「アジア芸能の未来」公演制作プロジェクト

(1) プロジェクトの組織・期間

■講師：松田正弘〈浄るりシアター館長〉，木村佳代〈ガムラン奏者・本学講師〉，樋口なみ〈ガムラン奏者・本学講師〉，相模人形芝居下中座，宇山朋秀〈舞台監督〉，篠原力〈照明〉，梶野泰範〈音響〉，永武賢二〈ディレクター〉，松下岳志〈デザイナー〉

■出演者：相模人形芝居下中座，東京音楽大学ジャワガムランオーケストラ

■編曲者：湧上哉樹

■受講生：公募による 15 名

■コーディネーター：福田裕美，田中香織，平舘ゆう

■期間：2020 年 9 月～2021 年 2 月

■公演会場：東京音楽大学 A 館 100 周年記念ホール

(2) 研修スケジュールと内容

プロジェクトは「実践セミナー」（全 4 回）と「企画・制作研修」（全 2 回），これ以外に会場となる東京音楽大学 A 館 100 周年記念ホールや zoom を使った多くの打ち合わせを経て，リハーサル（12 月 26 日），本番（1 月 11 日）というスケジュールでした。2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大によりリハーサルを終えた後に本番中止が決定し“幻の公演”となりましたが，本稿では企画立案までの経緯と最終的な構成・演出について触れ，伝統と現代，日本とアジアを繋ぐアートマネジメントのポイントを最後にまとめます。

《実践セミナー》

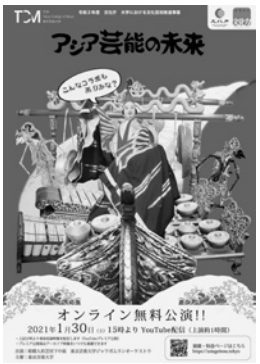
公演で扱う素材として，「人形浄瑠璃」と「ガムラン」をあらかじめ設定していたため，まずそれぞれの歴史的背景や現代での舞台公演の在り方に関するレクチャーを実施しました。あわせて，“未来のアジア芸能”のイメージについてのディスカッションを行い，企画する公演の理想像の共有を図りました（第 1 回）。受講生はそのイメージを元に約 60 分の舞台公演の企画立案を行い，各々の企画案についてディスカッションを行いました（第 2 回）。そして講師による講義，人形浄瑠璃とガムランの体験を経て，受講生の企画案を元に，講師及び受講生がディスカッションを重ね公演の大枠の構成を決定しました（第 3 回）。こうして，「アジア音楽の未来はコラボレーションだけではなく，それぞれの音楽が独自の発展をすることにもある」という受講生の意見を生かし，伝統的な演目をそのまま見せた後に，コラボレーションによる新たな異文化の伝統芸能の表現の可能性に挑戦することとなりました。

この間に積み重ねたディスカッションでは，アイルランド音楽やガムラン，和太鼓，雅楽，エレクトーンやピアノ，琉球舞踊等の活動歴がある，そしてモンゴル音楽やデザインを専攻する学生をはじめ様々な職業と経験を持つ幅広い年齢層の受講生ならではの多彩な意見――アジア芸能の本質に言及しながら，公演の具体的方向性へとつながる貴重な意見が多く飛び出しました。

これらのディスカッションを受けて，講師から楽曲として「戦場のメリークリスマス」，楽器として「ピアノを入れる」，演出イメージとして「光」と「風」が提案されました。「与えられた素材を受講者が個々に捉えなおして欲しい」という狙いのもと，講師からは敢えてこれらの素材を出した理由を示さなかったため戸惑いの声も聞かれましたが，そうした率直な印象も含めて受講生たちはこの素材に向き合い，自ら集めた情報をもとに個々に解釈を加え，公演の大枠の構成に対して個性豊かなイメージと演出案が提示されました。

《企画・制作研修》

この研修では，演出・舞台製作チームと広報チームに分かれ，受講生の案を反映させながら公演の構成の肉付けが始まりました。コラボレーションについては，演出チームの議論の末に，日本とインドネシアの信仰を象徴し結びつける「宝



「アジア芸能の未来」公演チラシ

船」というモチーフをまず決定し，「人形がより生き生きと動くためにはストーリーが必要」といった意見から浄瑠璃演目とガムラン演奏をリンクさせるストーリーが検討され，舞台全体が具体化していきました。

そして「戦場のメリークリスマス」という楽曲と「ピアノ」という楽器については，それらが主体となるのではなく，導入や繋ぎの役割とすることも決定されました。また，実務面ではガムランと人形浄瑠璃の専門家であるそれぞれの出演者，そして舞台監督，舞台照明，音響の専門家，デザイナーらのプロの仕事を目の当たりにするとともに，プロを相手に自らのイメージを形にしてもらうための「伝え方」を学ぶ機会ともなりました。

5 まとめ

以上をとおして受講生たちに伝えたかったことを，最後にまとめます。

①アジア芸能のステージ上での表現

日本の人形浄瑠璃とインドネシアのガムランという異なる歴史の中で育まれてきた二つの伝統芸能を，「アジア」という大きな枠組みの中で表現することを目指しました。これにより，自文化（人形浄瑠璃）と異文化（ガムラン）の間に立ちながら，アジアという視点でどのようにまとめるのか，そもそもの文化の枠組みについて改めて捉え直す機会となりました。

そして，それらを一つのステージで出会わせるに際しては，それぞれの芸能の個性を尊重しながら融合させていくためのストーリー展開と演出，それを可能にする音響や照明等の技術が必要であることを，舞台をつくりながら学びました。

②芸術と社会の間に立ったアートマネジメント

今日，アートマネジメントには芸術と社会との間に立ちそれらをつなぐ役割，芸術・文化と現代社会との好ましい関わりを探求することとその先に成熟した社会の実現という役割が求められています。これを踏まえ本プロジェクトでは，「公演を成功させること」に目標を置くのではなく，企画立案に至るまで，および公演実現に至るまでの過程に重きを置きました。一人一人がアジアの伝統芸能に向き合い，観客に向かって何を伝えたいのか，ひいてはその先の社会においてどのようなアジアの伝統芸能の未来を実現させたいのか考えることで，芸術と社会をつなぐアートマネジメントを体験してもらいました。

③伝統というバトンを受け取り未来へ

最後に「アジア芸能の未来の進化×深化」というテーマについて考えてみたいと思います。松田氏の言葉を以下に紹介します。

「現在おこなっていることは新しい仕掛けですが，これが200年後には古典となります。この間時代は変わり，人々の価値観は変化していくでしょう。その中で伝統芸能も進化×深化していく必要があります。そのままが200年後に残っていればいいとは思っていません。時代に伴って変化していく，そしてそぐわなければ消滅していくさだめを背負っているのです。進化×深化を求めていれば必ず新たなものが生まれていきます。そういう意識のもと行うのが，アートマネジメントの仕事だと思っています。」

現代において「伝統芸能」をアートマネジメントする，創造するということは，伝統との断絶ではありません。むしろ，伝統というバトンを受け取った者として，それを未来につないでいく責任を背負うことを意味します。したがって伝統を受け継いで現代において生き生きと進化×深化させ，未来につなぐための「創造」であることが大切であり，私たちは現代において，これまでの歴史を背負い，これからの歴史を築き上げていく役割を担っていることを忘れてはなりません。

（福田裕美，執筆協力：松田正弘）